

浦里明烏夢泡雪

二八

山名屋の段

〔解題〕 明和六年七月三日に、幕府御賄方伊藤伊左衛門の悴伊之助(廿一歳)と吉原京町二丁目薦屋抱へ三芳野と情死したのを材題として最初に淨るりに綴つたのは新内節の「明烏夢泡雪」(本卷同項参照)であつた。これより浦里時次郎の名は名高くなつたと共に、新内特有の物のやうであつたが、嘉永四年二月市村座で「明烏花濡衣」の外題で坂東しうかの浦里、八世團十郎の時次郎で清元太兵衛が淨るりを語つて大好評を博し、又同年三月大阪の大西芝居でも「明烏夢泡雪」を興行して居る。(只誠翁の情死録には弘化四年興行とあるが、大阪歌舞伎年鑑には見えて居ない)。かういふ大勢に刺戟されたものか、嘉永六年二月大阪新築地清水町濱の竹本綱太夫の

操芝居で、妹背山の切として「明烏雪の曙」と題して山名屋の段を出し、口を竹本田喜太夫、切を竹本咲太夫が語つてゐる。これが人形芝居の明烏の始めらしい。越えて翌安政元年四月道頓堀の竹田芝居で興行の時に外題を「明烏六花曙」とした。これが今日行はれる外題である。詞章は新内の明烏を取入れてある點もあるが、大分義太夫式に改められて筋も複雑になつて居る事は本文を讀めば分る。

～座敷も靜かなる。雪はまだ。残りすれども。今に於て手がかりもなく。地と縁が心得て傍をそつと高欄より。て寒き春の風。吹き晴れぬ身の浦里が。浦里に迄憂き苦勞。とても生きては居。塀の外面を見おろして。目早く縁がアスエカ、り湯上り姿その儘に。禿の縁打られぬ身。せめて縁が顔なりとも。餘レ申し。詞時様が塀の外に。來て居さ連れて。上る二階のフシ部屋の内。地所ながら暇乞ひ。ア、思ひ廻せば廻すんすわいな。地と聞くに嬉しさ浦里は。それと縁が煙草盆。長地力、り煙に憂さ程。これ迄契りし甲斐もなし。通ひ走りかゝつて高欄に。手をかけながらは晴らしても晴れぬ思ひの時次郎。廊に咲く花の色香も深く馴染めし。浦伸上り。詞ナウ時様。よう逢ひに來ては山名屋の。浦里にさへ恨めしく人目ぬ。浮世の中の有様かと。スエテ身の成振仰向けど松ケ枝に。せきくる涙はらの關を忍ぶ身の。雪の夜道を迷ひ來て。果ての悔み言。地それとも知らずナウ。と互に積る戀の淵。フシ心に濡る塀の外面に。フシしよんぼり。と。詞縁。詞そなたに渡した昨日の文。見附るばかりなり。詩イヤ申し時次郎様。ア、浮世の中とは言ひながら。水の流れられぬ様に。持つて往てたもつたか。どうした因果でこの様に。堰きにせかれと人の行末。先達て御主人の重寶。ソリヤ氣遣ひでさんせぬ。時次郎様れて逢ひたさの。猶いや増る戀の間。臥龍梅の一軸。紛失したる我が過り。に。直に渡しました。ア、コレ聲が高。地初會にふつと可愛さの。長地身にし地それ故に勘當受け。忍び／＼に詮議い。もそつと靜に言やいなう。アイ。み／＼となつかしく人目の關の夜着の

中明けて悔しき。髪を髪ついついとき上ぐる櫛の齒も。言ひ度い事の數々も今は言はれぬ二人が中。戀しい人を振捨てて一人。ぬる夜の手枕も。彼の邯鄲の枕なら。夢になりともせめてまあ。添臥す事もあれかしとわしや。幻に見えうとて惚れはせぬものあぢきなやと。我が身をとんと高欄にもたれかゝりし立姿。柳の枝に春雨の風吹き添ゆる。フシ風情なり。地男は漸う涙を抑へ。訓いつ迄斯うして居たとても。限りもなき五の中。長居する程そなたの身づまり。とは言ひながらその縁。地親ともえ言はず親方の口顔を忍び子心にも。さぞや恨みん不便やと。くどき歎けば二階には縁を膝に引寄せて。はつとばかりに取亂し。フシ又も涙にむせびける。地折から來かゝる足音にはつと驚き立上る。氣轉きかして禿の縁。延を丸めて塀の外投げやる知らせに時やて。其まあ髪のはらつき様。ついで次郎。様子あらんと用水のフシ陰に隠れて忍び居る。地部屋の戸明けて髪詰髪。モウさつぱりと氣も晴れさうな事のお辰。それと見るよりオ、花魁え。詞ぢやぞえ。オ、お辰様の言はんす事わい。たへと縛れる氣が晴れても。斯う結び目が弛んでは。ついでに。い今日はたんと仕事もつかへ。又あつちこつちの部屋々々から。呼びに參じてあるけれど。そこへして抜けて來やんした。しかし花魁。お前はきつう濟まぬ顔。そして目元もうるみ。どぞ悪うござんすかえ。コレ縁。ちと氣をつけて。薬でも上げやいなう。ア、りてつらき憂き涙。流れの身には猶積り。イ最前から。さう思うて居さんすけれど。フシ雪風。寒き塀の外。通ふ心の穗ど。薬はいやぢやと言ひやんす。オ、に吹く。地お辰もさすが物馴れし。世間咄を取交せて。詞イヤ申しおいらん。止めにしやんしよわいな。オ、さうぢモウ世間の事と言ふものは。其身にな

らねば知れぬもの。わしも昔を思ひ出 一つの程。狀の取りやり澤山に。紙屑 長い命を短うする事。わしが身に覚え
せば。まんざら斯うでもなかつたが。 が一杯詰つた揚句には。心中に出よう がある。殊に又その内此縁といふ様な。
斯う言へばをかしい話する様なれど。 と乗が来た所。常から中よい友達が留 可愛らしい子でもあると。無分別は出
どうした事やら常々から。お前の事が めてくれたが幸ひとなつて。今では女 されぬく。義理といふのも。可愛と
氣にかゝり。イヤサ。お前に聞いて貰 夫が氣安う暮す。モウ斯うなると榮耀 言ふのも。命あつての事いな。オ、是
ひ度いと思つて居た話。マア一寸聞い の八百。モウ一寸氣に入らぬ事がある はしたり。つい話に身が入つて。鬆直
て下んせ。アノわしがやうな見つとむ と。ヤイ出て失せい隙やるわ。とモウ憎 すのを忘れた。地とつい立上る筋立の。
ない女子でも。壁にいふ鬼も十八とや の戀も覺める。とよう言つた事ぢや。と 氣さくな意見浦里が。目には泣かねど
で。どないか思つてくれたが。今の サ思ふも年の功だけぢやわいな。オ、と曇るらん。地縁もなく。梯箱を。
主ぢやわいな。ホ、ホ、ホ。モウ色々 と思ふも年の功だけぢやわいな。オ、と曇るらん。地縁もなく。梯箱を。
口説かれ。マアく今のが濟んだと お辰様とした事が。わし等が様な勤め 取片付けばお辰も共に。汲取り涙立上
思はんせ。サア深うなつてきて。モウ の身で。可愛と思ふ人もなし。思つて り。調ドレく。是から向ひの東屋へ
何の事はない。指切り鎌切りといふ様 くれるお客も。亦廣い世界にないもの 往て參ぜう。花魁さらば。と地言ひつ
になると。コリヤ友達に斯うした事で ぢやわいな。サアくそぢやわ つも。おりの梯子を廻り縁そつと切戸
金が入る。二歩貸せ。三步貸せ。サア いな。さうは言ふものゝ花魁も。今が を明けて出る。お辰は二階を振返り。
しまつた。コリヤ小遣ひの錢箱にしら 戀盛り。毎夜々々のお客にも。深い可 調コレ縁。勝手へ廻ると隙が入る。此
れたわい。と思つたれど。サア迷うた 愛。モウ命もやり度いと言ふやうな主 切戸から向ひへ行く程に。部屋でナツ
が因果。エ、儘よ。若い時は二度はな が出來ると。サア何が親方は堪く。逢 レ。しつぽりと締めてたもと。地小陰
い。と仕面工面して。とうと小袖簞笥も はれはせず。せうことなしに突詰めて。 に忍ぶ時次郎を。無理に押しやる切戸

口。ばつたり閉めてさあらぬ顔。傘かさふり
かたげ小提灯こていとう。フシフシけてお辰は急ぎ行
く。地人の情に引入られ。時次郎は
段梯子だんたきとしや遅しと駈上り。走り寄つ
て浦里が。手に手を取つてしめ泣きに
スエテ只むせび入るばかりなり。地涙な
がらに時次郎。詞何時まで口説き歎い
ても。返らぬ今の我が身の不運。地と
ても生きては居られぬ此身。そなたも
共にと言ひ度いが。要共二人一緒に死
すならば。跡で。可愛やこの縁は。どう
なるものぞ不便やな。今死ぬる身を永
らへて。我が亡き跡で一過いっかの。回向くわうを
頼む浦里と。聞く程せきくる涙ながら。
ソリヤあんまりちや情ない。今宵別れ
てわしが身や。可愛縁は何とならうと
思はんす。死なねばならぬ覺悟なら。
三途さんずの川もコレ。この様に親子手を取
り諸共と。なぜに言うては下さんせぬ。

氣強い男とばかりにて。身を震はして。る足音浦里が。胸に轟き時次郎を。無
泣き居たるフシ心ぞ。思ひやられけり。理に炬燵たてへ忍ばすれば。縁は機轉きてん有合
地折から遺手やての聲として。詞浦里様はす。フシ夜着打落せて立退けば。地

く。ちよつとお目にかゝり度い。ちさあらぬ身みに詞オ、おかや様とした
やつと下りて下んせ。はやうくと地ことが仰山おほやまな。何の用でござんすえ。
せはしなく。わめきながらも段梯子上エ、何の用。何の用とはしらなくし



浦里折檻の場

解け、ヲシ亂すばかりなり。地欠伸まぜ どうぞお任せ下さらば。へい、く、く、く、又おれ次第やがな。ヤコレお浦。そりにおかやは立寄り。詞テモしぶとい 有難い仕合せ。地といふに主は打ちちややなう。とても白狀せぬからは。おなづき。詞ム、外の者なら赦さねども。ノソレ深き心のありそ海ぢやモウ、く、のれも次手に冥途の供。と、地又も等を暫しの内は彦六。おかやそちら二人に振上ぐる。折から來かゝる手代彦六。預け置く。きつと白狀致させよ。その此體見るよりコリヤどうぢやと走り寄間に我は休息せん。と、地のしが仕業のつて引退くれば。おかやはむつとしニ罪科も。後日の難は兩人に譲る心の奥レ彦様。詞お前はマア何で浦里が。肩の間の、ヲシ機押明け入りにけり。地跡を持ちに出やしやんした。へ、無様な見送つて彦六が。浦里が傍にちよつつからこの手代。貴様たちに用はない。く、這ひ。詞コレ今旦那が何と言うたえ。ずつとそちらへ寄つて居や、く、といふ外の者なら赦さねども。暫しの内は彦に。へ、へ、へ、へ、。憚りながら此手代が。六。その方に預け置く。何とどうぢや旦那へ一寸お願ひがござります。エ、えらい者ぢやあらうがの。ぢやに依つ何でござりますわい。ム、アノ可愛らて。常々からおれがいふ様にさへすりしい。アノ浦里ではないアノ縁。またや。此様な痛い目に合はすまいに。イヤ浦里は常々から私が。アイヤ常々から又。おれが素振を見て。わが身とおれ氣質はよい者でござります。へいそことの疑ひもあるぢやある。コレ腹立ちを見込んでこの彦六が。アイヤ折檻はやんなや。爰が辛抱ぢやわいの。廊に手代の役。白狀は私が致させます。ある中ぢやがな大事ないがな。こゝはをおかやが取つて突退くれば。等追つ

取り會釋あはれなく。おかやが腰骨めつた打ち。叩き倒され雪まぶれ。忽ち凍え取ナホス。勝手ハナハ足早に。おのれ一人が吞込んで。是さへあれば一飛びに。そ様と一緒詰めてフシうんとはかりにどうと伏フシ。見やるあなたの二人は先へ出で給へ。我らは最前見てす。其間にちやつと彦六が。二人の二階より。忍び。忍びて屋根傳ひ。傳置いた。アノ床の間の掛物を。せしめいましめ解きほどく。はすみに縁は目ひてたわむ松が枝も。今宵一夜のかけを聞き。ヤアかゝ様はそこにか。と聞い橋と。足もそごろに定めなきオクリ何なく。下りくる時次郎。見るより二人は飛立つばかり。アとお前は時次郎様。思ひ。奥をうろ／＼彦六が。掛物な斯う二人を助けたからは。斯うしてから何事も残らず聞いた。可愛二人が拍子に氣の附く遺手あてのおかや。ヤア彦は居られまい。若しも知れたら。おれを様かいのとしがみ付く。顔見て悔げり騒縛つて斯くの通り。ヤアこいつは壺つぼちの悦びは。最前主が言ひしを。二階でぎ出し。ヤア桑原々々助け船と。叫ぶやわい。とても通れぬおれが身の上。是こそ誠に日頃尋ぬる。金岡が自筆のサアおちや。ござれと顔合ひ。互にム、いつそ二人を連れて退き。調ノリ君にこなたは又悔り。縁を背に時次郎。を我らがかたげて出て。二人しつぽり一軸。エ、忝いと。人無きを幸ひに。手に手を鶏の聲。いづくを指して行く幕すなら。雪に凍えて死すとても。だ我が手に入りしはそなたの蔭。コレ。空や。早や。東雲の明鳥。飛ぶが如くんない。コレ大事ない。ほんに忘れた臍へそくりの。路銀ろぎんを取つて来る間。爰に。機轉きてんの浦里行燈の火。吹消す合圖にを離れず待つて居や。見付けられたと。彦六が。探り足してコレ／＼お浦。